

## 受験生は『The Guardian (ガーディアン)』をチェック！

埼玉大、東京外国語大、学芸大、千葉大、早稲田大、法政大、日本女子大、同志社大、東京女子大、駒澤大、学習院大、専修大、聖心女子大、成蹊大、芝浦工大・・・

これ、全部 2021 年度の長文出典が

[「The Guardian \(ガーディアン\)」](#)



だった大学です！（明治、慶応、上智、日大、津田塾大、立命館大は2021年入試で出題された！）しかも、出題の傾向を見ると、多くの大学は、前の年（2020年）の3～5月の記事を出題していることが分かります。ということは、2022年度入学用の入試問題は、2021年の3～5月の記事から出るという可能性が高いということなのです！

ただし、ウェブサイトに行っても、膨大な量の英語で何が書いてあるか分からない！（もちろん読める人は読んだ方がよい！）という場合は、

DeepL

翻訳サイトに英文をコピーをして、気になる記事や入試に出そうなトピックの英文を日本語に翻訳して読む。

ただそれだけでも十分に受験対策になるのです！！また、試験に出やすいとされる、前の年の3～5月の記事を検索する際は、たとえば google で

[2021 March guardian](#)

と検索すれば、2021年3月の記事がザクザクゲットできます！さらに、その中から入試のトピックになりそうな文を選ぶには、例えば

covid19

とか

AI

などを検索語に加えれば良いのです！

騙されたと思ってやってみてください！特に早稲田大学はいずれかの学部でこの

「[The Guardian \(ガーディアン\)](#)」

が出典としてでる可能性が非常に高いです！！ちなみに、以下の QR コード先は、[2021 年早稲田大商学部で出た英文記事](#)のリンクです！



【原田の予想問題！コレが入試に出る！！】

以下の文は、2021 年 3 月 24 日のガーディアン記事です。DeepL 翻訳もつけてみたので、ぜひ翻訳と読み比べて、意味をチェックしておきましょう！もしかしたら、もしかするかもしれません！！

Wed 24 Mar 2021 07.00 GMT

Action needed to tackle post-Covid 'loneliness emergency', MPs say

Investing in more benches, public toilets and street lighting will encourage people to reconnect, says parliamentary group

Britain needs more benches, public toilets and street lighting to encourage lonely people to start mixing socially again once the lockdown ends, MPs and peers say.

Action is needed to tackle a "loneliness emergency" that the Covid pandemic has exacerbated by denying people contact with family and friends, the parliamentarians say.

The call comes as new polling by the British Red Cross shows that more than a third (35%) of Britons feel less connected to their community than they did before Covid-19 struck and 39% do not think their feelings of loneliness will go away once the restrictions on everyday life lift.

Almost a third (32%) are worried that they may not be able to connect with people in the same way they

did before the pandemic, according to a representative poll of 2,000 UK adults by Opinionium.

The cross-party all-party parliamentary group on loneliness wants Boris Johnson and his government to ensure that the country has a “connected recovery”. They also want ministers to do more to close the digital divide, plan new housing developments so that residents can spend time together and fund charities and voluntary organisations that help “the lonely and cut-off”.

Neil O’Brien, the Conservative MP who chairs the group, said that during the past year “no matter where you live, neighbours and other quality connections – including those on the internet – have mattered”.

He said: “This means more public toilets, better street lighting, ramps and quiet safe spaces, so that everyone from all ages and all backgrounds has the facilities they need in order to make valuable friendships in their area.”

Zoë Abrams, the British Red Cross’s executive director of communications and advocacy, said tackling loneliness should be a priority because during the pandemic many people had faced “the life transitions that we know can lead to loneliness, such as poor physical and mental health, losing a job or losing a loved one”.

She said: “We know from our 150 years of responding to emergencies that people who are more connected socially are better able to cope with, and recover from, crises.

“A lack of a good bus service, free public toilets, parks and gardens, baby-changing facilities or accessibility adaptations can put up barriers that prevent people from connecting with others in person.”

A government spokesperson said: “The impacts of Covid-19 are being felt across the world, but the UK government is leading the way in tackling the issue of loneliness.

“Since the beginning of the pandemic we have invested over £31.5m in organisations supporting people who experience loneliness and a further £44m to organisations supporting people with their mental health.

“We recognise that the easing of lockdown restrictions will not mean the end of loneliness for many people, which is why this will remain a priority for the government.”

【DEEPL 翻訳】

国会議員、COVID事件後の「孤独の緊急事態」に対処する必要性を指摘

ベンチ、公衆トイレ、街灯を増やすことで、人々のつながりを取り戻すことができる、と議会グループが発表

英国にはベンチ、公衆トイレ、街灯がもっと必要であると、国会議員や専門家が述べています。

議員たちは、「孤独の緊急事態」に対処するための行動が必要であり、家族や友人との接触を拒否することで、COVIDの流行が悪化していると述べています。

英国赤十字社の世論調査によると、英国人の3分の1以上（35%）が、COVID 19 が流行する前よりも地域社会とのつながりが希薄になったと感じており、39%が日常生活の制限が解除されても孤独感が解消されないと考えていることがわかった。

また、オピニオン社が英国の成人 2,000 人を対象に行った代表的な世論調査によると、ほぼ3分の1（32%）が、パンデミック前と同じように人とのつながりを持てなくなるのではないかと心配しています。

孤独に関するクロスパーティーの全政党議会グループは、ボリス・ジョンソン氏と彼の政府に、国が「つながりのある復興」をすることを望んでいます。また、デジタルデバイドを解消するための活動や、住民と一緒に過ごせるような住宅開発の計画、「孤独で切り離された人々」を支援する慈善団体やボランティア団体への資金提供なども求めています。

このグループの議長を務める保守党のニール・オブライエン議員は、「どこに住んでいようと、隣人や、インターネットを含めた質の高いつながりが重要になってきた」と過去1年間を振り返っています。

と語っています。“これは、より多くの公衆トイレ、より良い街灯、スロープ、静かな安全空間を意味し、あらゆる年齢層、あらゆる背景を持つ誰もが、自分の地域で価値ある友情を築くために必要な施設を持つことができます。”

英国赤十字社のコミュニケーション・アドボカシー担当エグゼクティブ・ディレクターであるゾエ・エイブラムス氏は、パンデミックの間、多くの人々が「心身の健康状態の悪化、失職、愛する人の死など、孤独につながるということがわかっている人生の転機」に直面していたことから、孤独への取り組みは優先されるべきだと述べています。

と語っています。「150年にわたる緊急事態への対応から、社会的なつながりを持つ人々は、危機に対

処し、そこから回復する能力が高いことがわかっています。

「充実したバスサービス、無料の公衆トイレ、公園や庭園、ベビーカー交換施設、バリアフリー設備などがないと、人と人とが直接つながることができなくなります」。

政府の広報担当者は次のように述べています。「COVID 19の影響は世界中に及んでいますが、英国政府は孤独の問題への取り組みをリードしています。

「パンデミックが始まって以来、私たちは、孤独を経験する人々を支援する組織に 3,150 万ポンド以上を投資し、さらに精神的な健康を支援する組織に 4,400 万ポンドを投資してきました。

「我々は、ロックダウン規制の緩和が多くの人々にとって孤独の解消を意味しないことを認識しており、これが政府の優先事項であり続ける理由です」。

